Jeanne-I | Yoshikazu Yasuhiko

原著 | 大谷暢順

Très chers t bien-aimés, Jeanne l
Pucelle, qui ésirerait bie
a reçu votr ettre dans laquelle
vous lui d siez que vous
craigniez d tre assiégés.
Vous ne le s ez pas, si je
puis rencontre les ennemis d'ici quelque temps.
Si je ne les re contre pas, ils ne viendront pas
vous assiéger, vous fermez vos portes. Car je

pourrai venir rapidement vers vous; et si
les ennemis s'y trouvaient, je les ferais
chausser leurs éperons avec tant de hâte
qu'ils ne sauraient par ou les prendre,
et, dans le cas où ils auraient mis le siège
devant la ville, je le leur ferais lever rapidement.
Je ne vous écris pas autre chose pour le moment;
soyez toujours bons et fidèles. Je prie Dieu
qu'il vous ait en sa garde. Écrit à Sully, le 16 mars.

ジャンヌ|I|目次

一四三一年五月三〇日
フランス北部の町ルーアンの広場で

一人の少女が
火焙りの刑に処せられた。

この小さな町
ヴォークールールで
わたしは育ちました。

町には
それにちょうど似合うような
小さな城がありました。

その城の主
守備官
ロベール・ド・ボードリクールが
わたしの養父なのです。

養父―というのには
もちろんわけがあります。
本当の父や母は別に
いるのです。でも
そのことは後でお話し
しましょう。

わたしはまず
ある冬の日にわたしが初めて
不思議な体験をした時のことから
お話を始めようと思います。

その時、わたしは
お城に一番近い
「フランスの門」の傍らの
陽だまりの中で
一人遊びをしていました。

そこへ
その人が
やってきた
のです。

その人は
わたしを見て
にっこり笑いました。

それで
わたしは
少し
ほっとして

どこへ行くの？
とたずねました。
その人は
答えました。

フランスへ

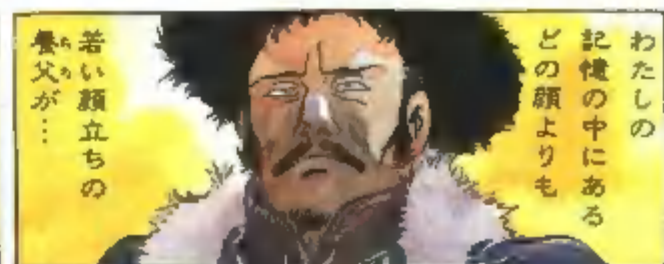
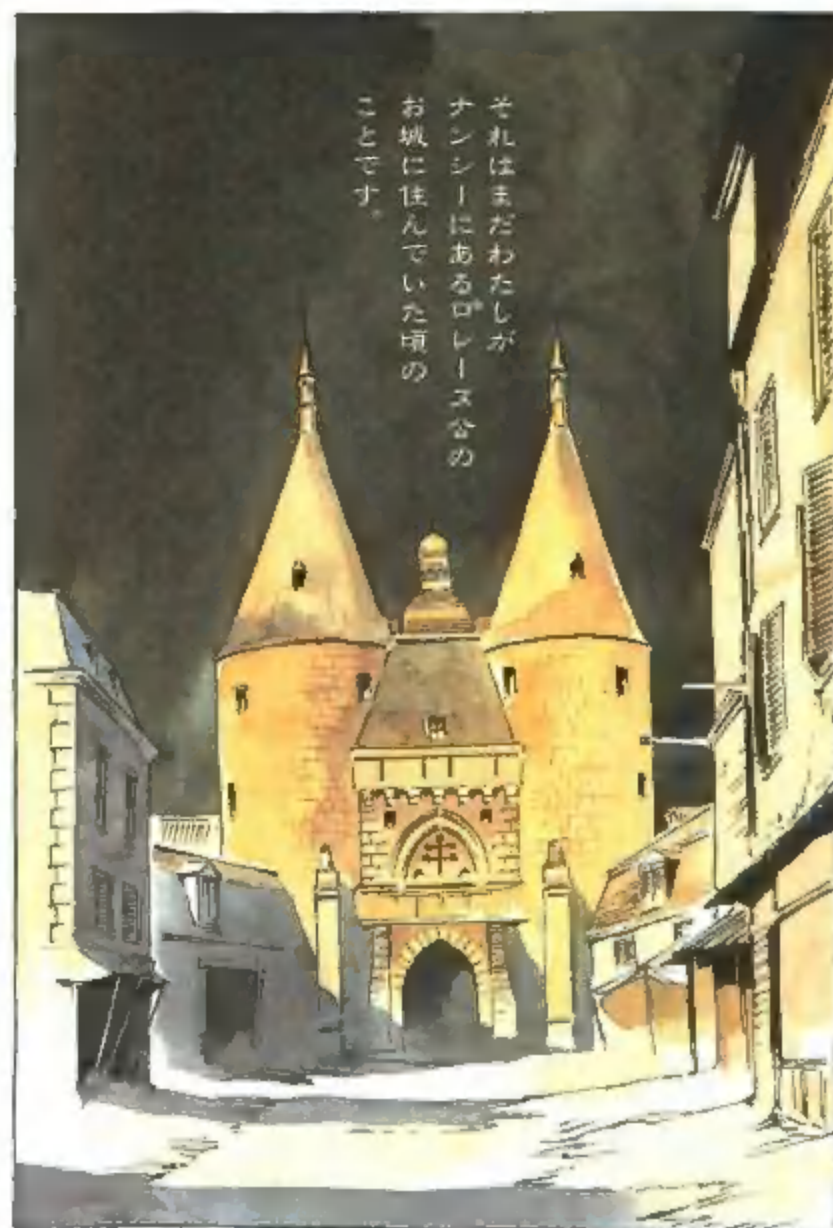
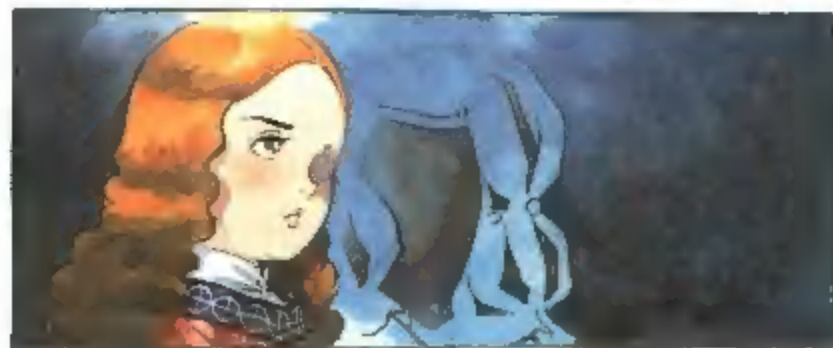
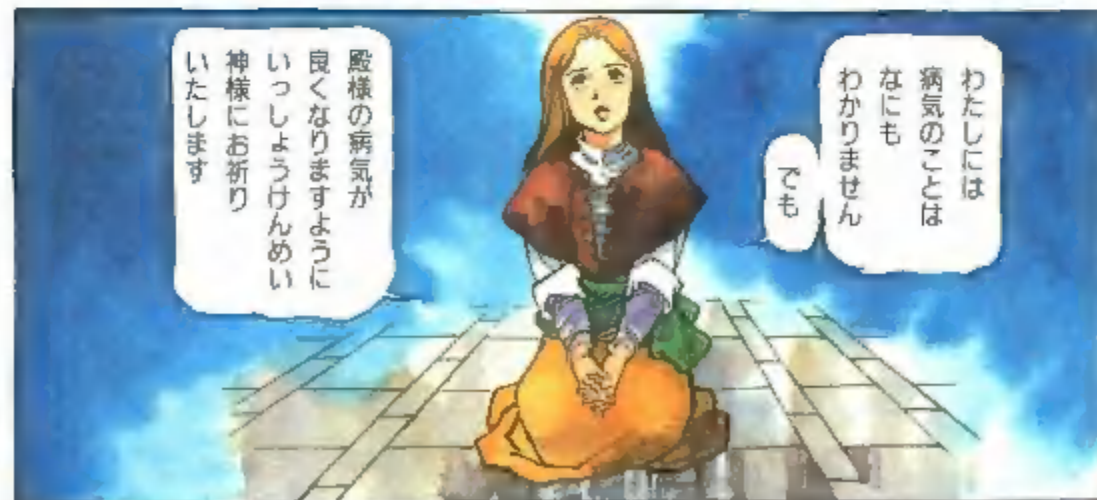
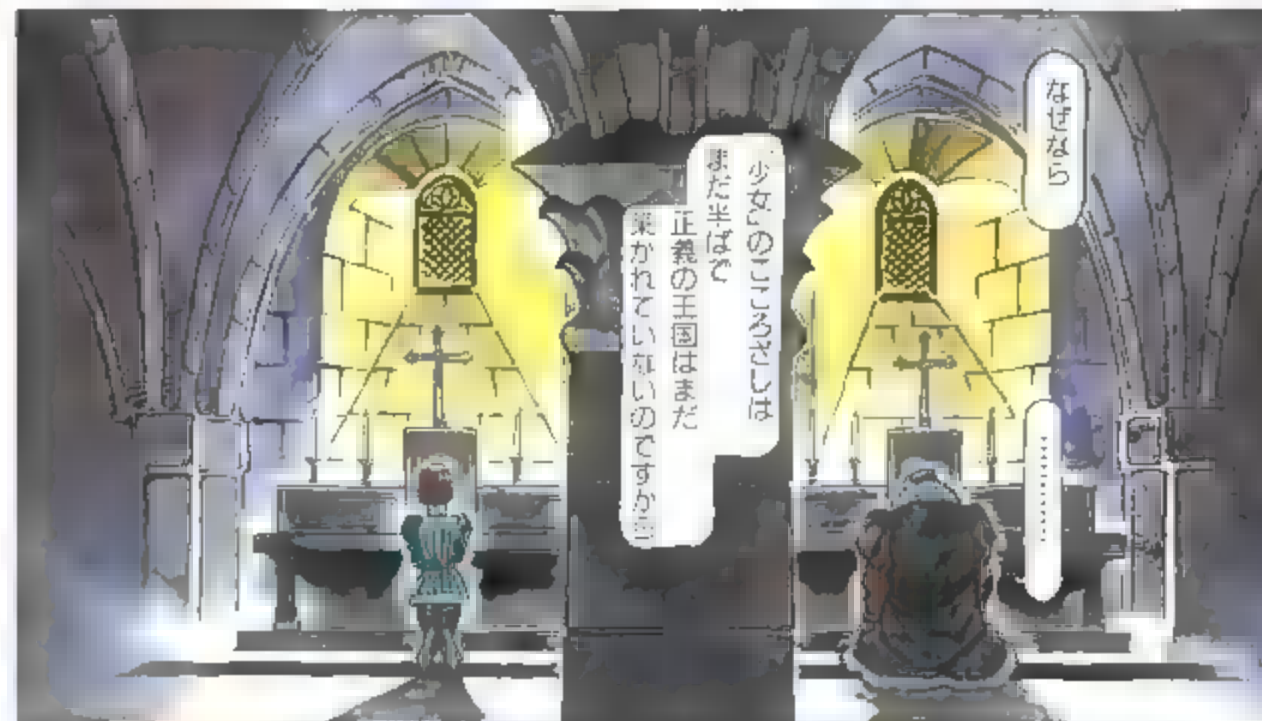
ずっと後になってわたしは知りました。
その時わたしが見たのは
わたしがこのお城に引き取られるよりも
三年前にあったある出来事の
まぼろしだったということを。

でも、
その時わたしは
ふたつのことのために
ひどくびっくりしていました。

ひとつはその女の人が
男の服装をして
男のように髪を
切りそろえて
いたことです。
——そうです、
じつはわたしも

女だったのに
ここでは

男の子として
育てられていたからです。

＊ロレーヌ公——ロレーヌ公シャルル二世。フランス王国と神聖ローマ帝国にはさまれたロレーヌ地方をおさめた領主

娘よ
おまえは奇蹟を行えるそうだな
殿様
わたしは
神様のお告げを聞いたのでございます
わしの病気をなおすことができるか？
わたしには病気のことはなにもわかりません
でも
殿様の病気が良くなりますようにいっしょうけんめい神様にお祈りいたします
二人のふしぎなやりとりをわたしは夢の中で眠るようにして見ていたように思います。
幼い時でしたから
大人達それぞれの気持などなにもわからず…
母はアリソン・デュメという名の美しい人でした。
でも奥方は貧しい商人の娘で、もちろんローレーヌ公の正式なお后ではなかったのです。

＊アラスの和議——一四三五年に行われたこの和平会議により、アルマニャック派とブルゴーニュ派に

ルネ・ダンジュー――前出のロレーヌ公の娘婿であり、のちにシャルル七世の妃マリー・ダンジューの兄。[illegible]ジャンヌ・ダルクと行動を共にする

好きにさせてください！
わたしはいろいろなことが知りたいのです！
「少女」のように
なりたいのか

かまいません！
それが与えられたわたしの運命なら！

おおお…
オレはまたなんと
呪われた男だ！

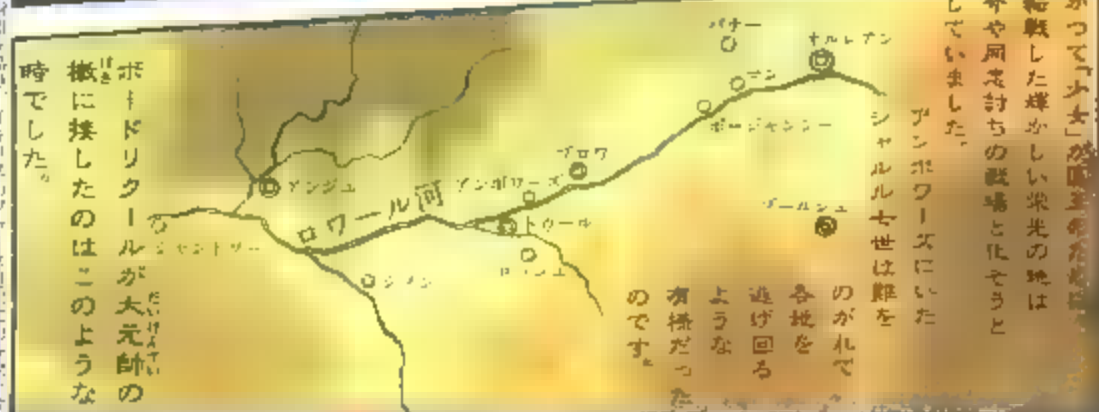
神もよくよくこの田舎侍を試みられる！
王国の為によかれと思ってしたことで
あの善良な百姓女をも殺させてしまったというのに！

大元帥の陣にはわたしを遣ってください！
きっとお役に立てます！

おのれおまえも
そのようなことを言うかっ!!
戦争を望みたいのではありません！ 城主がいなくなっては このヴォークルールは、
国王を見放されてさんざんな目にあってしまいましょう！

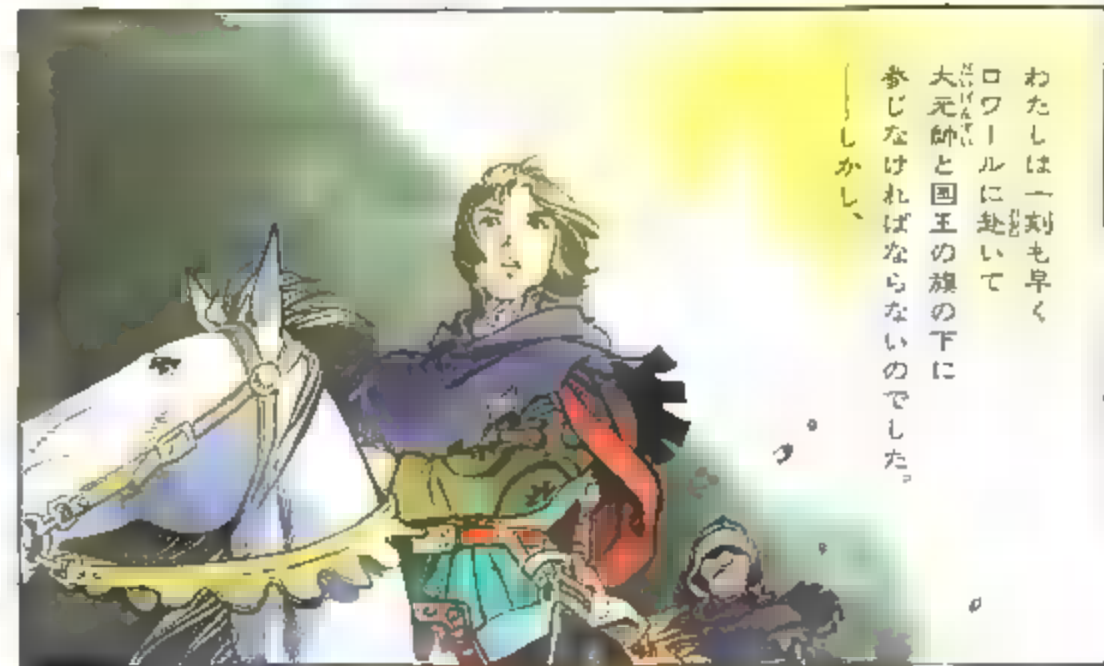
神の御加護を信じて参ります
わたしは「少女」のようにお告げを聞いた者ではありませんが
「少女」に奇蹟が許されたように神の御支持が国王様の側にあるならば
「少女」の万分の一かはわたしも国王様のお力になれると思います
……

第1章

DOMREMY
ドンレミイ

かつて「少女」が国王のために転戦した輝かしい栄光の地は今や同志討ちの戦場と化そうとしていました。

アンボワーズにいたシャルル七世は難をのがれて各地を逃げ回るような有様だったのです。

パテー
オルレアン
マン
ボージャンシー
ブロワ
アンボワーズ
アンジュ
ロワール河
トゥール
ブールジュ
シャントソー
シノン
ロシュ

ボードリクールが大元帥の檄に接したのはこのような時でした。

わたしは一刻も早く
ロワールに赴いて
大元帥と国王の旗の下に
参じなければならないのでした。
――しかし、

わたしには
その前に
ぜひとも行って
みたい場所が
あったのです。

ドンレミ、
そうです。
ドン
レミイ!!

わたしとはたった一度、あのロレーヌのお城でしか
会ったことのない「少女」
それなのにあんなにはっきりと
「フランスの門」でまぼろしの姿を見せてくれた「少女」

あなたのことが、わたしは
気がかりでしょうがない。
あなたにもう一度
会いたい。
会っていられると
お話がしたい、
いろいろなことを
訊きたい。

そう思っていたのです。
だから、この村に来たいと……
この村に来ればきっと
またあなたに……

!

わあああああ!

こら
逃げるな！
逃げんでいい!!

われわれはヴォークールールの者だ!!
落ちつけ!!

街道荒らしじゃなあい!!
逃げるなあああ!!

なんでも
近々王様と王太子様の戦争があるで街道荒らしが来るらしいのでのお…
村中でしばらくの間南のヌーフシャトーに逃げようということになってな
若い男手がこう少なくなっては
なんの手向かいも出来んもんで…
ほお
おまえさまが
ヴォークールールの若様かえ？

なるほど 話では 聞いて おったが
男前じゃのォ ボードリクール 様に似ず
ほんに
女にしたいような お顔立ちじゃ

若様
どうか 早う強い 殿様になって わしらを守って くだされ
ボードリクール様は いい方じゃが なにぶん…
ご家来衆が 少ないでのォ

ダルクさんの家？

教会の隣だよ
片流れ屋根の
わりと大きい
家だから
すぐわかるよ
……
もう誰も
住まなくなって
ずいぶんに
なるから…

誰も
いない？
ああ
娘のジャンヌが
あんなことに
なったからねえ
父親は
力を落として
早死にして
母親と兄弟も
家を出ち
まった…
手柄をたてて
貴族様に
なった頃は
よかったが
ねえ…
終まいが
あれじゃあ
やっぱり
百姓は
なにがあっても
おとなしく
百姓仕事に精を
出していれば
いいのさ

少女・ジャンヌ…

どんなにか
あなたは
この家に
帰って来たかった
でしょうに…

お父様や
お母様の傍らで
心優しく
暮らしたかった
でしょうに…

こんな終わりのない戦争の
時代でなかったら…

あなた

ジャンヌ・ラ・ピュセル？

フランスでは
みんな
そう呼んだわ

おひさし
ぶりね
エミール
ずいぶんと
待ったわ
あなた
やっと
わたしと
同い年に
なったのね

でも
今は
ちょっとだけ
待っていて
いいでしょ？

この糸を
とって
しまいたい
のよ

わたしには
もうあまり
時間がないいん
だもの
もうすぐ
ヴォークールールへ
行って
それから
出なければならないから……

……
!

秋?!
今は
秋ー?!!

あなたはまだ
四つか五つの女の子
ロレーヌ公のお城で
暮らしていた

さあ
行きましょう

わた
大好き
大き
の

妖精の木

そう！

よく
御存知
ね！

この木の下にはね

昔 女の魔法使い達が
集まって踊りを踊ったり
していることが
あったそうよ

でもそれは
ずっと遠い昔の
お話よ

今はもう
そんなことは
ないの

村の人達が福音書を
読むようになったから

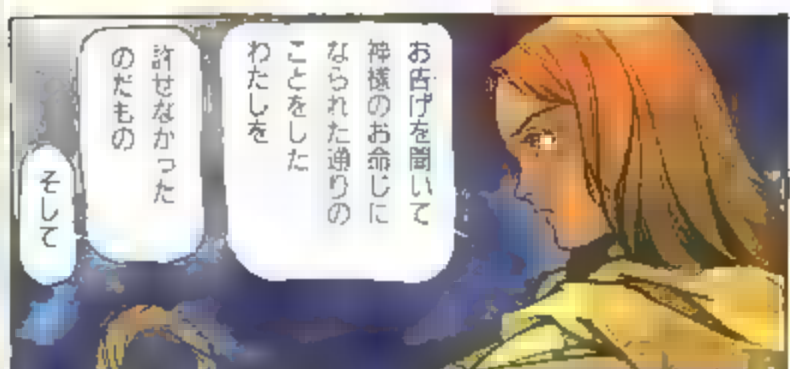
今 この木の下で
歌ったり踊ったり
するのはわたし達

とても
楽しいのよ

それなのにルーアンのお坊さん達はしつこくわたしを責めたてたわ
木の下で魔女を見ただろう
妖精を見ただろう
魔法を習っただろうって…

わたしがお会いしたのに天使をお連れになった聖者なのに
聖ミカエル様と聖カトリーヌ様聖マルグリット様
そのことを話すとあの人達はいったいなんということを訊ねたとお思い？
聖者は裸だったか？髪の毛はあったか？秤を持っていたか？
イギリス人の言葉で話しかけなかったか？

おかしいでしょ
ねエミール
あの人達は聖者も天使も見たことがなかったのよ
高い身分について立派な教会におつとめしているというのに！

それどころかきっと
神様を信じてさえいないんだわ
だって
お声のこともお姿のことも決して信じようとしないのだもの

お告げを聞いて神様のお命じになられた通りのことをしたわたしを
許せなかったのだもの
そして
わたしを
焼き殺したのだもの……

ジャンヌ・ラ・ピュセル
わたしは…

あの冬の日のあなたのようにこれからフランスへ行くんです！
そしてたぶん剣をとって戦うでしょう
シャルル国王様のために

なにかをお命じになりたいんでしょう？
ちがいますか？

言ってください
ジャンヌ！
わたしにはお告げは聞こえない
聖者のお姿も見えない
でも
あなたは見える！声を聞くこともできる！

国王様をお護りしてください
どんなことがあっても

どんなことが
あっても——？

そうです
わたしがしたように
神の御意志がそうであることを信じて——！

冬の雷か
イヤな雲行きになったな

おい
あんまり遅すぎるぞ

お捜しするか
やはり

森の方を見て来る！
手分けして村を回ってくれ！

せっかく
おべんとう
こしらえて
きたのに！
でも
ダメだ
ほら！
西の方から
まっくろい雲！
ザァ…
くるぞ！

はあああい

ゴロゴロゴロ……
エミィル!!
エミール様!!

少女に……
……会われましたな?

なんと言いました少女は
あなたに

国王様をお護りしてくれと

信じるかい?
ベルトラン

もちろん信じますよ

あの娘は神様のお使いだったんです
本物の聖女だったんですよ

神様はいるんだと思いましたよ あの娘を見ていてはじめて

バチあたりな話ですがね

わたしにはとても

少女のようなことはできないから

国王様をお護りしてください
わたしがしたように神の御意志を信じて!
なにがあっても
なにがあっても――!

そうですかねえ…要らぬ心配なんでしょうかねええ
………
………

やああもう晴れてきましたよ
よいしるしですかねえ
心配するなと少女も言ってくれてるんですかねえ
うんそうだろう
たぶん

第2章

ORLEANS

オルレアン

あの時
夜通し歩きました
想い出しますよ

でも人並みに宿をとれるだけ今度のほうが楽です
あの時は
夜を日に継いで野宿野宿でしたからねえ

ベルトラン！
私にだってのんびりした旅が許されているわけじゃない！

リッシュモン大元帥は一刻も早く王陛下の下に集まれと檄を下さった！
急がなければならないんだ!!

朝まで駆け通すぞ!!
ついて来い!!

エミール様!!

待ってください!
ちがいます!
エミール様!!

ちいっ

気が
ついたか?

無茶はいけません!
あやまります!!

替え馬がないんですから!
乗りつぶしたらどうにもなりませんよオ!!

やれやれ
どうもものの言い方がマズかったようで……
しっ!!

!
!

ぬううっ…

さっきの宿で入れちがいになった奴等があやしい風情だった！
街道荒らしか！
くそ！目をつけられたな！

こら!!
うろたえるな!!
ひえええ!!

エミール様を
護れ!!

逃げろ!!

散開して逃げろ!!
早く!!

なるほど/
こいつか!!

捕まえろ!!

そいつは殺すな！
生け捕れ!!

いい金になるぞ!!

散れ!!

誰も手を出すな!!

オレがやる!!

下がれ‼
下がらぬとこの者の首
かき切るぞ‼

命が惜しいか⁉
ならば助ける／
部下を鎮めろ‼

降参すると言え‼
言わぬと――‼

わ…かった…

降参だ
負けたよ…

かわいそうなことをしました
気のいいやつだったのに…

あのおお
もういいかね?
!?だんなさま
ぶざまにしくじりをやってからこんなことを訊くのもなんだが…
あんたはいったい
どこの若様ですかね?
ヴォークールール城主ボードリクールの子
エミール
ヴォークールール?
ボードリクールだって?

聞いたことがあるぞ
ほれ あの「少女」の…
あの娘が出たとこだぜ
でもボードリクールってぇや
なぁんだ…
……

どうした?
フクザツな顔つきをしているな
……
いい値のつく人質になるような上玉でなくておあいにくだったな
とんだ見当はずれさ!

もうひとつ聞かせてくれ
そのボードリクールとやらの石様のおまえさんがわけありふうなお忍びの様子でいったいどこへ
なにしにいらっしゃるんだね?

大元帥の檄に応じて王陛下の下へ行くところだ
フランスのために!

そりゃあなんですかい?
ウマい話で?

喝!!
まて ベルトラン!
うまい話なら
王陛下に味方するかい?

するとも
あんたに降参したんだ あんたの…
言うことを聞こう
ただし

わかっている 金だな?
悪いようにはしない
本当かい
ああ
王陛下の財務官殿にかけあってやる!

ついて来い!

この河のむこうの
もう少し先がオルレアンか……

ねえいいんですか?
あんなのを引きつれて歩いて

ああ…
オルレアン!

ドカカ
ドカカ

ピエールか?!

どんな様子だ 町は?
えらく にぎやかです!

イギリスから オルレアン公が 帰ってこられる というんで
町をあげて お祝いの準備を していますよ!

シャルル・ドルレアン公が
お帰りになる?!

はい
今カレーに おいでだ そうです
オルレアンにいつ 戻られるかは わからない そうですが
で 兵隊は?

そりゃあ いっぱい いますよ
私生児・ドルレアン様が 王太子様に見放されて いるので 協力する諸侯も 集まっていて
もう たいへん です

お聞きの通りですよ エミール様
オルレアンに立ち寄ることなんてできません！
危険すぎるし それに 時間もない！

……でも
オルレアン……

夜通し馬をとばしても王陛下様の所へ急ぎたいくらいだとおっしゃってたではありませんか!!

よォ ベルトランのだんな

若様にそんなに
キツく意見をしちゃいけねえ

人間ってのは元気になれる時にはパアーッと元気になって
そうして次の仕事にかかるのが本当だ
景気のいいオルレアンを目の前にして素通りするって手はないと思うねええ

ほざけ！
街道荒らしめが！
なあにいい

待て！
二人とも!!

もう
日も暮れる
今日は
一日中歩いたし
みんなも疲れて
いるだろう

ここまで
きたのなら
ここで野宿
するのも
宿で寝るのも
同じような
ものだ
町に
入ろう

さすが
若様だ
いい裁き
だねえ!!

ただし！
いいか
ガルソン!!

町で悪いことを
するな！
たとえ手下の
一人にでも
不始末を
させたら
今度は
その顔を
叩き斬るぞ!!

へえ
へへへ
そりゃあ
もお…

オルレアン——
ここが……
そして

なんて
明るい町

そして
なんて
しあわせそうな
輝いた
人たち

ジャンヌ!
なんだか
あなたに
救われた時の
喜びが
この町には
まだそのまま
残っている
みたい!

ジャック・ブーシェの家?
ああ
少女の家ね!

ええ
ええ
宿屋じゃ
ないけど
泊めて
くれますよ

でもいまどきは
どうかねええ
エライ方の
御指名で
いっぱいじゃ
ないのかい

おあいにくだねえ

今夜はアランソン公爵様の御一行がお泊まりになっているんでね
もう一杯なんだよ

アランソン
公爵!

相手が悪すぎましたねえ
あきらめて他を当たりましょう

あ!
ちょっとあんた

おまえさんだよ

あんた あのボードリクール様のお身内なんだって?
そういうことなら話は別だ

屋根裏部屋でよかったら特別に
泊めてやってもいいよ

フン!

あなたの見たオルレアンの町も

こんなに明るい灯に満ちていた?

いいえ
きっとこの何倍もの
喜びの灯が
燃えていたので
しょうね
あなたを待っていた
町の人達を包んで……

ジャンヌ!!

動かないで
動かずに
そのままで
聞いて

第3章

LOUIS

ルイ

あなたは敵のまんなかにとび込んでしまったのよ！
逃げなさい〃

わたしどうかしていた!
はじめはこんなふうじゃ
なかったのに!だんだん――
ジャンヌ……
ジャンヌ?!
ジャンヌ?!
ラ・ピュセル!!
!

ガチャ
ガチャ
ガチャ
ガチャ

開けろ!!

開けんと叩き壊して入るぞ!!

なんだ?
上が騒がしいな
はあ…

ボードリクール様の
いうものですから
わたしも
つい……

ボードリクールっ

ガッ
ガッ

ガルソン!
おまえが!!
へへ…

悪く思いなさんな
王太子の側じゃこっちの言い値をしかも
即金で払ってくれるっていうんでねぇ
おまえさんの方よりはよっぽどいいハナシなんだ

あんたも出来ることなら
早いとこくら替えしたほうがいいぜ
なんでも国王さんの側はえらくシケこんでいて ぜんぜん勝ち目がないっていうじゃねぇか

黙れ!!
裏切り者!!

やあ

どうです? よくお休みになれましたか?

ところで今日はなにか?
それがどうもあいかわらずですよ 公爵

王陛下の居所がどうしてもつかめない
いったいどこを逃げ回っておられるやら

どこにいようとかまわん!!
リッシュモンを殺ればいいんだ!!

どうせやつがかくまっているんだからな!
かまうことはない!
一気に力攻めだ!!

またか攻めか
ラ・イール
貴公には
それ以外の
戦法は
ないのか?
リッシュモンは
ズル賢い男だ
うかつに出ると
やつの計略に
乗せられる

やはりあの
ブロワ会議の折
やつを捕まえて
しまうべき
でしたかな
私生児!
今それを
言って
どうする!!

さっきの話
ジャック・
ブーシェ
の家で捕まった
若い男だが
王の密使という
のが本当なら…
ん!
何か知って
いるかも
しれぬ!

ここへ
連れて来い!!

お許婚のこと
わたしはなにも
存じません
とぼけると
痛い目に
あわせる
ぞ!!

まて
ラ・イール!
ラ・イール!?

あなたが
あの有名な
ラ・イール
将軍?
ま
まあ…な

よく見知り
おくがいい
こちらは
シャルル・ド・
ブルボン公
わたしは
私生児・ドルレアン
前の侍従長
ラ・トレムイユだ

オレは
ラ・イールと
同じくらい
有名な
ポトン・ド・
サントラーユ

アランソンだ

そして…
あなたが
——?

わかりません!
何故!

どうして!
皆さんのような
立派な方々が
シャルル国王様に
反対なさるんです!?

王陛下は
皆さんが
戴冠させ
国王に推した
方では
ありませんか!
皆さんは
王陛下のために
少女と共に
たくさんの
血を
流して
イギリスと
戦ったのでは
ありませんか!!

味方同士の争いなんてすべきじゃありません!!
せっかくパリを取り戻してもう少しのところでイギリスを完全に
うち負かすことが出来るというのに!!
黙れ!!
無礼者オ!!
いいか!おまえは■■なんだ!!
それを忘れるな!!
しかも名もない■二オのクセに!いったい■に向かって説教しているつもりだ!!
待て
おもしろい
その者にもっと
好きに喋らせろ

続けろ
オレはもっと聞きたい

はい

無益な争いはやめなければなりません
もう百年も戦の絶えることのない日々が続いて民は疲れきっているのです
国中の畠は戦に消え農民は飢え街々には病がはびこり
人はみな街道荒らし達の略奪におびえています!

今こそ力を合わせて神に選ばれたシャルル国王様の下に結集し!
イギリスを打ち負かして国を一つにしなければなりません!
それがっー

神に召された少女の
願いなのです

……
それでおしまいか?

みんな!
席を払え!

オレはもう少しこの者と話がしたい
部屋を出ろ!

あなたは?

王太子
ルイ

おまえは
女だな?!

それ以上わたしになにかをなさったら
舌を噛みます!!

女だろう!
女のニオイがする!!
名前は?!
……エミール
本当の名前は?!
エミール・ド・ボードリクール
ん
ふ
まあいい
ならそういうことにしておけ
年齢は?
エミール・ド・ボードリクール?
…十七歳です
ほ
オレと同い年だ
それにしては腕っぷしが弱いな!
え!?
エミール・ド・ボードリクール!!

はて
いったいどこか
間違っておりましょう

まず！
父のことだ!!

まだあるぞ
おまえは民が戦に倦み苦しんでいると言ったな
だから争い合うのをやめろとそう言ったな
だがどうだ?
民は本当に争いを嫌っていると思うか?

おあいにくだ!
争いを嫌っているのは負け犬達ばかりだ!
争って相手に勝てると思えば人は争う!
戦う!!
そして相手の富を奪いより強く豊かになろうとする!!
それが人の性だ!

少女も同じだ
兵を励まして戦場に向かわせ自分も血をたぎらせて戦った!
戦が好きな女だったのさ!!

ちがいます!!

ジャンヌはつらい決心をして村を出たんです!
そして村へ帰れる日を待ちこがれながら戦ったんです!
フランスを救い一つにするために!
ふん!

じゃあ聞くぞ
なぜフランスは一つになって
イギリスに勝たねばならん?

なぜブルゴーニュやアルマニャックやブルターニュが別々の国であってはいかん?
ウィリアム征服王以来王家の血脈が通じ合うイギリスとフランスがいっしょになってはなぜいかんのだ?
そのどちらをとっていても戦はたぶんとうに終わっていた
ちがうか?

おまえのような
理屈では答え
られまい
だが
オレに言わせれば
カンタンだ

強いものが
勝つんだ

神は裁かない
ただ勝者を
祝福する
勝者が神を
讃え
かち取った富で
天にも届く聖堂を建て
領地を与え、聖職者達に
金ピカの衣を着せれば
神は全てを司るとする

汚れた
考えです!
王太子様
ともあろう
方が!

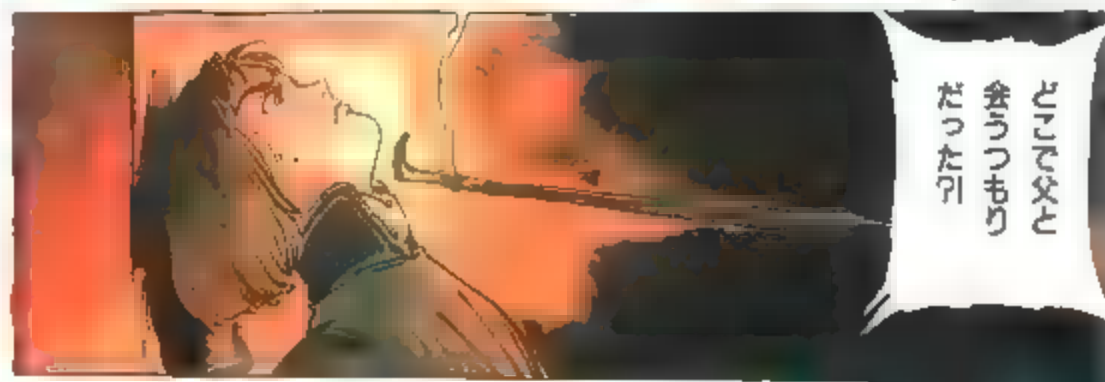
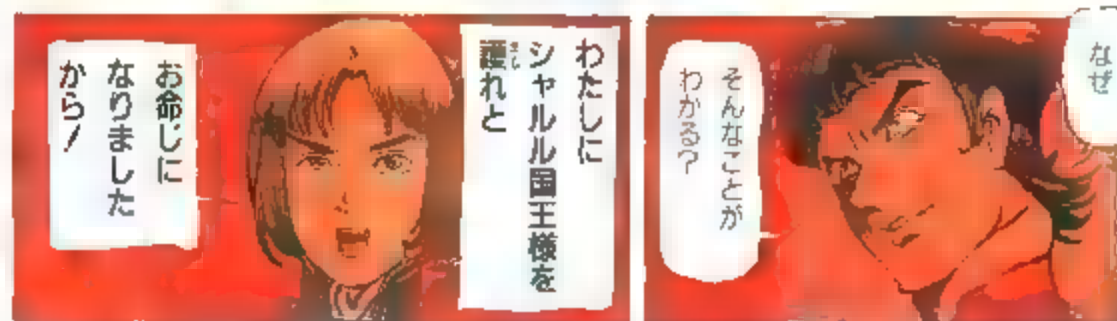
ガタ!

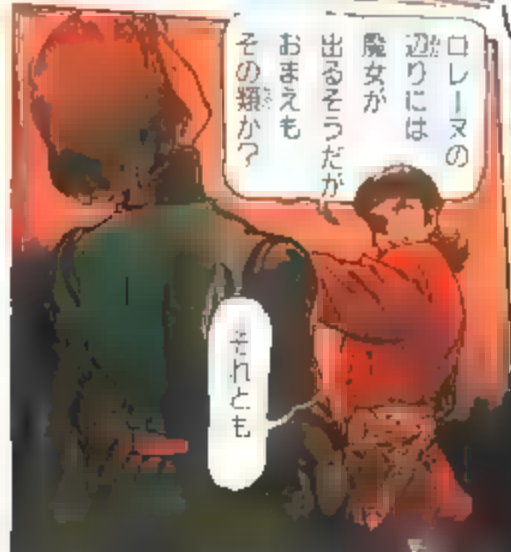
だが
真実だ!!

フランスに
味方する神が
いるなら
イギリスにも
いるだろう
だから

オレは
最初から
神の助けなど
要らん!!

ッ!

オレの力だけで
イギリスに
勝ち
ブルゴーニュ公も
ひざまずかせてやる

少女は王太子様を望んではおられません!

なぜ
そんなことがわかる?

わたしにシャルル国王様を護れと
お命じになりましたから!

ほざけ!!
ロレーヌの辺りには魔女が出るそうだがおまえもその類か?
それとも

乙女ジャンヌを気取ってみたくなった田舎娘のただの酔狂か?!

そのどちらでもないというなら父の居所を知っているはずだ!
いえ!!

どこで父と会うつもりだった?!

王太子様！
……
なにごとですか?!

ふふん
今のはなかなかいい身のこなしだったな

おもしろそうなやつだ
気にいったぞエミール・ド・ボードリクール

安心しろ
おまえの知られたくないことは
秘密にしておいてやる

もういいオレの用はすんだ！
しょっ引いていけ!!

わたしは
なったの

なにが
本当なのか！
正しいのか！

なぜ
あなたが

わたしじゃ

王陛下を

揚げろ

それには

ならないの

そんなの
そんな
耐え続け
いけない
ない!
の?!
わからない
そん
できない//
そして
わたしには無理!/
できない//
ただの女です!
は
です!
ジャン
から
好きに
させて
わたし
自分で
悪いように
きっと
から!

たすけて!

ジャンヌ!!

ちっ！
逃げたか
やはりな
だが窓を破ってとは畏れいった
よくもあの高さから

塔の下を川底まで捜せ！
川下もだ！
やつは死体になってあがるとは限らんぞ！

バタール!!
兵隊を出せ
馬と舟もだ！

うまくすると
泳ぎだすかも
しれない…

ジャンヌの時代

ジャンヌ・ダルクの生まれた十五世紀初頭は、イギリスがフランスを今にも併呑（へいどん）せんとしていた時代であった。

この時代、イギリス王はフランス国内に広大な領土を持っていた。こうした、今日から見れば奇異な事態は、すでに十一世紀に始まっている。それは、フランスの一地方であるノルマンディーの公爵ギュイヨーム（ウイリアム）が、一〇六六年、ヘスティングスの戦に勝って、イギリスの王位に昇ったことに始まる。これより、イギリス王家は代々、ノルマンディー公を兼ねることになり、さらに、婚姻政策によって、フランスの諸侯の領土を次々に相続して、イギリス王家はしだいに大陸内に領土を拡大した。

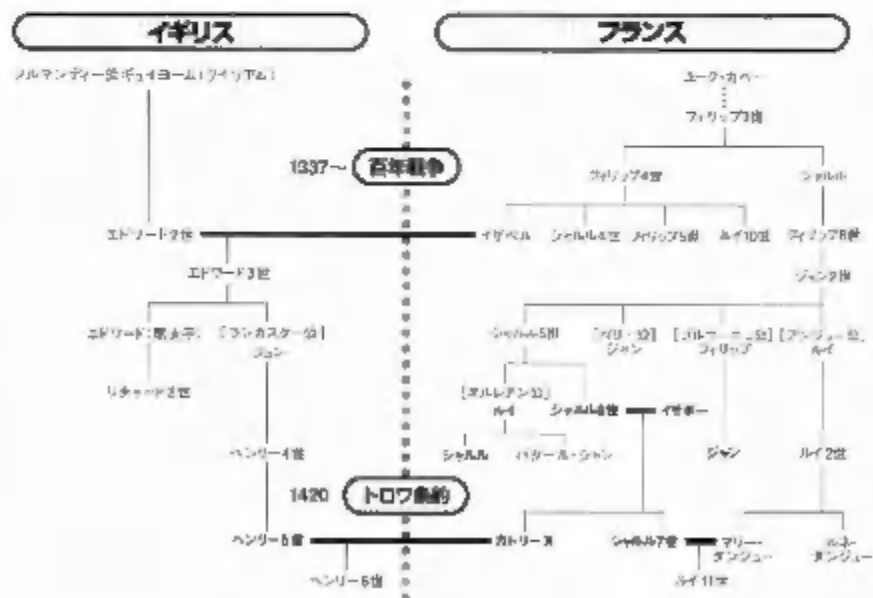
こうした、フランス国内におけるイギリスの領土の存在が原因となって、一三三七年に勃発したのが、世にいう「英仏百年戦争」である。

当初、戦況は英王エドワード三世と、その子エドワード太子（黒太子とあだ名される）に率いられた英軍が優勢であった。

しかし、一三七六年、黒太子はペストにかかって世を去り、エドワード三世もまた翌年病没した。フランス王シャルル五世は、この好機をのがさず、ただちに反撃を開始した。フランスの町々は次々にイギリスの支配を脱し、ここにフランスはいったんイギリスの圧力から解放される。

しかし、シャルル五世が崩じ、その子シャルル六世が王位についてまもなく精神に異常をきたす事態になると、フランス宮廷内において諸侯の権力争いが起こる。そして、一四〇七年、オルレアン公ルイが、ブルゴーニュ公ジャンのさしむけた刺客のために暗殺される。これより、ルイの息子シャルルを中心とするアルマニャック党と、ブルゴーニュ公一派の確執は内乱へと発展していく。

これに乗じたイギリス王ヘンリー五世は、三万の大軍をもってフランスへ進撃。アゼンクールの戦に勝利をおさめる。

この危機に際して、フランスでは、ブルゴーニュ公ジャンが国内一致して外敵に当たる必要に目覚め、一四一九年、シャルル六世の子で、アルマニャック党が擁する太子シャルル（のちのシャルル七世）と会見しようとする。ところが、アルマニャック党の人々は、オルレアン先公ルイの仇を果たさんと、ブルゴーニュ公ジャンを殺害してしまう。この事件が、国内二派の対立を決定的にし、結果として、さらにブルゴーニュ派をイギリスに結び付けることとなる。また当時、太子シャルルと不和となった太子の母・

王妃イザボーは、シャルル六世を見捨て太子の廃嫡宣言をする。その王妃のうしろだてによって、一四二〇年、イギリスとブルゴーニュ派のあいだに「トロワ条約」が結ばれる。この条約は、太子シャルルを廃して、シャルル六世の娘カトリーヌとイギリス王ヘンリー五世の婚儀と、ヘンリー五世のフランスの王位継承を定めた。

こうしてフランスは、フランス宮廷内の内紛に乗じたイギリスに併合される危機を迎える。太子シャルルは、宮廷内の一部の人々に擁せられてブールジュにあったが、イギリス・ブルゴーニュの連合勢力のまえに、対抗できる力はなかった。

＊　＊　＊

ジャンヌ・ダルクは、一四一二年、ムーズ川に沿う一寒村ドンレミイに生を受ける。川を南に二十キロほどいくとヌーフシャトー、北に数キロほど行くとヴォークールールの町がある。彼女が生まれてまもなく、ロワール北岸、つまりフランスの北半分はイギリス側に制圧された。ただ彼女の生地の一帯、ヴォークールールからヌーフシャトーに至る南北わずか三十キロほどの細長い猫の額ほどの地が、フランス王家に忠実に留まっていた。ヴォークールール守衛官ボードリクールが、フランス方であったからである。

ジャンヌの父親はジャック・ダルク、母はイザベル・ロメーといった。とくに裕福でもなく、また貧乏でもなく、だいたい中農の家であったという。そして両親ともにたいへん信心深かった。

十三歳のある夏の日、家の庭にいた彼女は、突然、教会の方角から目がくらむほど明るい光が射してくるのを見た。同時に、「ジャンヌよ、善良で行い正しくあれ。足しげく教会へ通え」という声を聞いた。それからのち、声はたびたび彼女に語りかけるようになった。そして、その内容はしだいに具体的になっていった。

「ジャンヌ、フランスの王を助けに行け。そして彼に王国を返してやるのだ」

「ヴォークールールの守衛官ボードリクールに会いに行け。彼が汝を国王のもとへ連れて行くであろう。聖カトリーヌと聖マグリットが汝を見守るであろう」

「オルレアンの囲みを解き、王をランスに連れて行き戴冠せしめよ」

彼女は太子シャルルを、そしてフランスを救わなければならなかった。しかし、それは荒くれ男たちのあいだへとびこんで、彼らに号令し、戦場を駆け巡ることであった。楽しく温かい家を捨てるということであった。

最初に啓示を受けてから五年後、ジャンヌはついにヴォークールールへと旅立つ。そして守衛官のボードリクールを説得し、シノンで太子シャルルとの会見を果たす。その後、ジャンヌは天から与えられた使命を果たすべく、軍隊を率いて、イギリス軍に包囲されていたフランス側の拠点オルレアンを解放する。そして、太子をランスへ導き、そこで戴冠式が行われ、太子が正式にフランス王シャルル七世となるのを見届けるのである。

ジャンヌは使命を果たし、奇跡を起こした。しかし、その後ジャンヌを待っていたのはあまりにも苛酷な運命であった。パリ奪回に失敗し、コンピエーニュで捕らえられ、ルーアンでの宗教裁判、そして、火焙り……。ヴォークールールを旅立ってから二年余り、奇跡と悲劇にみちた一人の少女の生涯に、こうして幕が閉じられたのである。

電子書籍版

ジャンヌ

安彦良和

Original　日本放送出版協会

Digital Distributor

eBOOK Initiative Japan Co.,Ltd.
〒101-0062　東京都千代田区神田駿河台 2-9-18
http://www.10daysbook.com/